

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19402005

研究課題名(和文) 東南アジアにおける地域コンフリクトの緩和・予防と「共生の知」の創出
 研究課題名(英文) Mitigation and Prevention of Local / Regional Conflict in Southeast Asia and an Emergence of Wisdom for Symbiotic Human Relationship

研究代表者

伊藤 哲司 (ITO TETSUJI)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：70250975

研究成果の概要(和文)：多彩な学際的メンバーでチームを構成し、3つの現地調査班(ベトナム・インドネシア・フィリピン)を構成し、さらには理論班を組織した。それらの相互協力によって、各地域の状況や地域コンフリクトのあり方の特徴が明らかになり、「共生の知」の創出については、草の根の人々による成功例(フィリピンの場合)などが見出された。また地域コンフリクトの緩和・予防の後に「共生の知」が創出されるというように単純には進まないこと(コンフリクトがありながら、ある種の「共生」が成り立ちうること)なども明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Interdisciplinary diverse members constituted a research team. The three field survey groups (Philippines, Indonesia, Vietnam) were made, and even a theory group was organized. Through the cooperation among them, the characteristic ideas of local / regional conflict and situation in each region have been revealed. On the creation of "wisdom for symbiotic human relationship", the successful case created by the people in grassroots has been found in Philippines. Also we found that the process to reach "wisdom for symbiotic human relationship" isn't simple as it may be found after mitigation and prevention of conflict.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2008年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2009年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
総計	12,900,000	3,870,000	16,770,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：東南アジア、地域コンフリクト、共生の知、学際研究、サステナビリティ学

1. 研究開始当初の背景

東南アジアは、中東地域からの海上交通の要衝にあり、歴史的にも古くから日本との関係が深く、日本が行う人的交流や国際貢献の対象としてもきわめて重要な地域である。しかし周知のとおりこの地域では、東西冷戦構

造の中で翻弄され、大規模な戦争が発生したことなどから、国際的・国内的な問題が現在でも根深く残っている。また、国家の再建と政権の早急な安定を重視するあまり、紛争当事者たちの間の和解を軽視してきたことが問題を拡大させてきた。それらのことが、こ

の地域における共生への大きな障害や、人間の安全保障が守られない原因となっている。これらの問題解決のためには、「上から」の法政策論的なアプローチだけでは、不十分である。国際 NGO やその支援を受けた地域の市民社会組織 (CSO) などによる諸活動が、当事者間の対立感情を緩和することで、紛争の和解に向けて大きく貢献しているからである。この方面の国際 NGO の諸活動から言えるのは、当事者間のコミュニケーションや共同行動を通じ、お互いの相違点と同時に共通性や共通の問題を認識してもらうことが和解には必要だということである。当事者に直接焦点を当て、人々の記憶や心性、共同体や人間関係の在り方などにも注目する「下から」の社会心理学的なアプローチがあってこそ、法政策論的なアプローチも有効に機能する。本研究では、政治的・宗教的・民族的対立およびそれらが原因と見られる明示的な紛争のみならず、必ずしも顕在化していない、人々に共有された心理的葛藤をも包含する地域コンフリクトという概念に注目した。

2. 研究の目的

地域コンフリクト緩和のためには、とくに本研究が注目する地域マイノリティの人々が、どのような歴史的記憶を共有しているのかを明らかにすることも重要である。たとえば、難民となって国外に出る、国内に残って過去の記憶と何らかの妥協をはかりながら社会的地位を達成する、あるいは 10 数年を経て帰還するなどの現象は、紛争地の圧倒的多数の普通の人々に共通するものである。それらの記憶や現象が、どのように記憶され、それが現在の地域マイノリティとの間に、どのような心性とそれに基づく社会関係をもたらしているのであろうか。それが、紛争によって分断された国家の政治的な統一の後、経済発展を続ける一方で和解が進まない地域において発生し続ける、さまざまな人間の安全保障上の問題 (経済格差・生活環境の破壊など) の原因を明らかにすることにつながるだろう。地域マイノリティの人々の言葉は語られる場が乏しいがゆえに、このような紛争持続要因としての心性とそれにもとづく現状へのまなざしの有り様が、これまで明るみに出されることはなかった。このような社会心理的な問題構造を解明し、ひいては共生の知を明らかにしていくことは、地域マイノリティとその周辺の人々自身の安全の確保だけではなく、人間の安全保障について、その概念や実践にとって新しい観点と手法を提案できるだろう。それは、人々にとっての「かけがえのない中枢部分」(人間の安全保障委員会報告の定義より) を守り、暴力をとまなう紛争からの回復に必要な社会心理的側面を明示し、人間の安全保障を政治レベル

からではなく、社会・共同体レベルから促進する一助となる。本研究は、人々の社会心理的側面を重視する紛争予防のあり方を模索し、人間の安全保障研究の領域に欠けている部分を明らかにしつつ、それを補完することを可能にするものである。

3. 研究の方法

本研究では、フィリピン・インドネシア・ベトナムにある特定の地域を具体的な調査地とした。これらを調査対象とする理由は、次の通りである。フィリピンのネグロス島では、政府側と非政府側 (左翼運動) の対立の構造が解けておらず、暴力的な紛争がまだ一部で続いている。インドネシアのアチェでは、激しい独立運動が続いていたが、2004 年末のインド洋大津波の被害を被ったことなどをきっかけに、かつての明示的な暴力が見られなくなったものの、災害復興の過程で人々の不満がくすぶっている。ベトナムのサイゴン (現ホーチミン市) では、かつての南ベトナム (ベトナム共和国) の側にいた人々が、戦後語る語れない葛藤を抱え込んでいる。このように 3 つの地域は、地域コンフリクトがなお顕在化しているところ、地域コンフリクトが表面的には見えづらくなって間もないところ、地域コンフリクトが潜在化して長年たっているところという特徴を有しており、それらを比較検討することによって、特定の地域の事例だけでは見えてこない理論的な検討が可能になる。

地域マイノリティを対象とした現地調査を各調査班が実施する。それらの人々の生活圏に出向き、その地に滞在しつつ、その生活世界を観察し、キーとなる人々への聞き取り調査を実施するそれによって、生活集団の凝集性を支えている歴史的記憶、他の集団 (特にマジョリティ集団) との分断と交流について自らを納得させるストーリーやロジック、これらから生じる感情の配置を取り出す。さらに現地調査の成果を共生の知につなげるため、本研究の特長でもある理論班が、共生哲学を枠組みとして理論的な考察を深める。理論班は、既存の平和学や共生に関する哲学的思考の中から当該地域での地域コンフリクトの緩和と予防の仕方、それに共生のあり方の構想のための概念・アイデア・考え方を抽出する。

4. 研究成果

これまでの調査で、たとえばフィリピンのネグロス島においては、紛争当事者の両側に通じた人物が仲介する「アレグロ」(英語の「arrangement」に相当) という仕組みが、地域コンフリクトの緩和と、当面の共生を可能にしていくことが明らかになっている。一方、インドネシアのアチェでは、自然災害と

いう「外圧」があつての変化という側面が強く、人為的で有効な手だてがなお見出しづらい。ベトナムのサイゴンでは、そもそも地域コンフリクトの存在が公には認知されていないということが分かっている。

これらの地域の具体的な特徴をさらに抽出し、当事者たちがなぜ地域コンフリクトからなかなか抜け出せないのか、その要因を明らかにすることが今後の課題である。そしてそれらの事例に、従来の関連研究から得られる理論的な枠組みを踏まえた比較検討を加え、具体的にどのようにすれば有効な地域コンフリクト緩和が進むのか、そして同時にいかにして当事者たちによる「共生の知」の創出が動き出していくのか、そのモデルを構築していくことが望まれる。このモデルは、他の地域における未解決の地域コンフリクトの緩和にも適用できる可能性があると考えおり、それぞれの地域への知見のフィードバックを通して、現実を実際に変えていく一助となるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

- ① 横山正樹 開発協力と開発紛争フィリピンというレントシーキング社会における伝統的紛争緩和手法 “アレグロ” の発見と適用 国際交流研究 (フェリス女学院大学国際交流学部紀要) 査読無 2011 年, 13, 75-107.
- ② 金光男 アチエの資源開発と紛争に関する一考察 ユーラシア研究 (The Journal of Eurasian Studies) 査読有 2011 年, 8, 155-186.
- ③ Seiichiro HASUI “Climate Security and its implications for integrating paradigms of development and security.” in Susumu Iai, Sawa Takamitsu, Seiji Ikkatai eds. Sustainability Science V: Policy Recommendation towards Global Sustainability, (印刷中) 査読有
- ④ 蓮井誠一郎 「戦争と環境破壊 (分類番号: WAR) 46 項目」、環境総合年表編集委員会編 『環境総合年表—日本と世界—』すいれん舎 (印刷中) 査読無
- ⑤ Seiichiro HASUI “An Emergence of Wisdom for Symbiotic Human Relationship: A case of Local/Regional Conflict in Negros, Philippines.”, Paper presented at International Peace Research Association conference, Sydney, July 6-10, 2010. (A4 版 15 頁) 査読無
- ⑥ Mahoko KYORAKU Gender in War: The Case of the Vietnam War and Vietnamese Heroic

Mother. Social Alternatives. vol.29, 11-14. 2010 年 査読有

- ⑦ 伊藤哲司・京楽真帆子・岩佐淳一 「聞き書きノート: ベトナム・フエの元反戦運動家たち」『人文コミュニケーション学科論集』茨城大学人文学部紀要, 7, 21-44. 2009 年 査読無
 - ⑧ 菅野幸恵・北上田源・実川悠太・伊藤哲司・やまだようこ 「過去の出来事を “語り継ぐ” ということ」『質的心理学研究』, 8, 6-24. 2009 年 査読有
 - ⑨ 横山正樹 「環境的平和の追求」君島東彦編 『平和学を学ぶ人のために』世界思想社, 73-90. 2009 年 査読無
 - ⑩ 京楽真帆子・伊藤哲司・岩佐淳一 ベトナムにおける戦争と女性: 反戦運動と「英雄の母」『人間文化 (滋賀県立大学人間文化学部研究報告)』, 25, 15-25. 2009 年 査読無
 - ⑪ 蓮井誠一郎・伊藤哲司・木村競・京楽真帆子 「『地域コンフリクトの緩和』を理解する枠組み」『社会科学論集』茨城大学人文学部紀要, 48, 111-126. 2009 年 査読無
 - ⑫ 蓮井誠一郎 「気候安全保障と新しい世界秩序・日本外交」、佐和隆光編 『グリーン産業革命』(日経BP 社、2010 年) 246-266. 査読無
 - ⑬ Suadi and M. Nakagawa “Sharing the Commons: Resolving the Tragedy of the Commons through Collaborative Management of Coastal Commons at Kedonganan Village, Bali”, Kyosei Studies, 3(1), 263-285. 2009 年 査読有
 - ⑭ 横山正樹 「開発援助紛争の防止へむけた平和学的ODA 事業評価の試み—フィリピン・バタンガス港の事例分析から—」『国学院経済学』第 56 巻第 3・4 合併号, 109-142. 2008 年 査読有
 - ⑮ 蓮井誠一郎 「『開発』と『安全保障』を再考する—サステナビリティへのパラダイム転換をめざして」木村武史編著 『サステイナブルな社会を目指して』, 61-79. 春風社 2008 年 査読無
 - ⑯ Suadi and M. Nakagawa “Resource Management Failures, Fishery Depletion and Conflicts in Indonesian Marine Fisheries”, Journal of Rural Economics: 2008 Special Issue, 334-340. 2008 年 査読有
- [学会発表] (計 11 件)
- ① ITO Tetsuji The Narrative of Former South Vietnam Soldiers and inhabitants: How can we mitigate the latent conflict? The Second Joint Seminar on Love, Vulnerability and Victimology. February 6, 2011, Tokiwa University, Mito

- ② Seiichiro HASUI An Emergence of Wisdom for Symbiotic Human Relationship: A case of Local/Regional Conflict in Negros, Philippines. International Peace Research Association conference. July 6-10, 2010, Sydney University, Sydney
- ③ Masaki YOKOYAMA The Grassroots Wisdom in Minimizing Casualties of Conflicts in Asia - Philippines: Does "Areglo" work? International Peace Research Association conference July 6-10, 2010, Sydney University, Sydney
- ④ ITO Tetsuji Wisdom for symbiotic human relationship - A case of local / regional conflict in Vietnam. International Peace Research Association conference July 6-10, 2010, Sydney University, Sydney
- ⑤ Yokoyama Masaki Conceptualizing Asian Peace Studies: A proposal for Overcoming Violence as the Joint Efforts in the Region to be initiated from the "peace-loving" Filipinos and Japanese. Invited Lecture by Silliman University. 2010年2月9日 Silliman University
- ⑥ Yokoyama Masaki, Hasui Seiichiro, & Kyoraku Mahoko Mitigation and Prevention of Local/Regional Conflict in Quest for Wisdom for Symbiotic Relationship in South East Asia. Asia-Pacific Peace Research Association Conference (APPR) 2009年9月12日 College of Indigenous Studies, National Dong Hwa University
- ⑦ 伊藤哲司・横山正樹 地域コンフリクトに関わるベトナム・フィリピン・インドネシアでの現地調査から平成21年度海外学術調査総括班フォーラム 2009年6月27日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ⑧ 横山正樹・蓮井誠一郎 フィリピンを平和学する！—地域研究の平和学：暴力/苦痛の現状をどうとらえ、その克服をどう展望するか/地域コンフリクトにおける地域住民の生存の知—茨大科研中間報告：フィリピンネグロス島の事例から 環境・平和研究会 2009年4月定例研究会 2009年4月25日 立教大学
- ⑨ Suadi & Mitsuhiro Nakagawa Sharing Nicely the Commons: The Balinese Solution to the Tragedy of the Commons. 共生社会システム学会大会 2008年7月26日 東京農工大学
- ⑩ Suadi and M. Nakagawa Resource management failure, fisheries development and conflicts in Indonesian marine fisheries. 2008年度日本農業経済学会大

会 2008年3月28日 宇都宮大学

- ⑪ 伊藤哲司 映画を媒介とした日韓の対話の試み：「円卓シネマ」の果たす役割 茨城大学・仁済大学校共催学術シンポジウム「日韓文化交流：過去と現在」 2008年1月29日 茨城大学

〔図書〕(計2件)

- ① 茨城大学ICAS 編 伊藤哲司・中川光弘他 『茨城大学発 持続可能な世界へ』 茨城新聞社 2010年 査読無
- ② 三村信男・伊藤哲司・田村誠・佐藤嘉則編 著『サステイナビリティ学をつくる』新曜社 2008年(蓮井誠一郎『『開発』からの脱却と人間の安全保障』, 185-195., 中川光弘「世界の食料問題とサステイナビリティ」, 109-119., 木村競「サステイナブルに生きるということ」, 241-252.を含む) 査読無

〔その他〕

ホームページ等

<http://info.ibaraki.ac.jp/scripts/webse/arch/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 哲司 (ITO TETSUJI)
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：70250975

(2) 研究分担者

横山 正樹 (YOKOYAMA MASAKI)
フェリス学院大学・国際交流学部・教授
研究者番号：90182716
金 光男 (KIM KWANGNAM)
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：10261728
木村 競 (KIMURA KISO)
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号：70241734
岩佐 淳一 (IWASA JUNICHI)
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号：10232646
京楽 真帆子 (KYORAKU MAHOKO)
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：00282260
蓮井 誠一郎 (HASUI SEIICHIRO)
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：00361288
中川 光弘 (NAKAGAWA MITSUHIRO)
茨城大学・農学部・教授
研究者番号：30302334